

[編集後記]

お手許に第9号をお届けする。昨年3月刊行第8号に続き、年1回の定期刊行という目標に近づけたことは幸いである。

本号には、研究論文2本と、実践報告1本を、掲載することができた。いずれも、編集委員会の査読を経ている。

太田（細野）真理氏の「松本地方の御柱祭—木遣りとその詞章の地域性—」は、木遣りの地域差と、木遣りの詞章の地域差とに、関係がみられることを指摘している。本会を創始された故馬瀬良雄先生は、民俗学と方言学は、両輪の関係にあることを常に語っておられた。両者への目配りを含む本論の掲載を、先生は、喜んでおられることと思う。

宇野翔子氏の「愛知県豊川市方言終助詞の記述的研究」は、終助詞の形態と意味の両面について、体系記述を行ったものである。長野県方言は、山梨県、静岡県方言とともにナヤシ方言という方言区画をなすが、静岡県境に近い愛知県豊川市方言の終助詞には、これとの連続性がみられて興味深い。当初は、2回に分けた掲載を予定していたが、今号は紙幅に余裕があったため、連載とはしなかった。

金子泰子氏の「大学における文章表現指導の実践—評価を組み込んだ系統指導—」は、長年にわたり文章表現指導について考察、実践されてきた氏の、最新の実践報告である。

さて、長野・言語文化研究会では、研究発表会と会誌の刊行が、会の重要な二つの柱を成している。活動報告からもわかるとおり、次年度には、第100回研究発表会を迎える。これと並行して、会誌においても、ひきつづき皆様からの積極的な投稿をお待ちしたい。投稿規定の整備も、順次行っていく予定である。(H.0)